

第4回「関西広域産業ビジョン」改訂委員会 議事骨子

- 1 とき 令和5年9月1日(金)午後2時30分から5時まで
- 2 ところ 立命館大学 大阪梅田キャンパス 5階 演習室2・多目的室
- 3 出席者 稲田座長、葛西委員、水野委員、上村委員、小笠委員、
中山委員、黒木委員(久米委員及び丸山委員は欠席)
中原広域産業振興局長、事務局

4 議事概要

議事「関西広域産業ビジョン」の改訂に関する意見交換(改訂ビジョンの骨子案について)

【P.3 現状分析・将来展望】

<委員>

できるかは別として、関西の現状と分析が入っているとよい。たとえば、デジタル活用について、日本の中で関西は遅れているのか進んでいるのか等、分析ができれば、より良いものになる。関西独自のファクターがあれば良い。

将来を展望する際のキーワードについて、「リープフロッピング」や「ゲームチェンジャー」など日本語で表現し難いものは現行のままでよいが、意味が変わらないものは日本語にしても良いと思う。

<委員>

プラスとマイナスの要素があるキーワードのうちマイナスの要素については、少しでもマイナスを減らす、プラスに転じさせるという方向性が必要になるため挙げていると理解している。その上で、キーワードのうち産業ビジョンで特に取り組んでいきたいところ、変えていきたいところを強調して書くとうわかりやすいと考える。たとえば、前回委員会にて、関西としては蓄電池に力をいれていきたいということであったが、その目的は、脱炭素に力を入れていくことに繋がるからだと思う。このように、関西として食らいついていきたいところを強調して表現したほうが良いのではないか。

<委員>

関西万博のウエイトは大きいですが、開催が決定した時と今では状況が変わってきている。コロナ禍、ウクライナ問題、原材料価格の高騰など環境が変化し、国民の万博への意識がしぼんできていると感じ、危機感を持っている。

関西は高い技術力をもつ中小企業が多くあるが、どんどんなくなっていった

る。このような企業が日の目を見ることができればよいと考える。

また、関西広域連合が狭い範囲にとどまることなく、各府県が成長できる方法を考えていきたい。

現状分析のトレンドとしてピックアップする内容はよいが、資料はカタカナが多く、一般の人には分かりにくい。

<委員>

概ね違和感はないが、マイクロプラスチックについては、重要な課題ではあるものの他の項目と比べると小さく見え、違和感がある。

キーワードはよく整理されているが、そこに繋がるからどうなるのかを書くことで、よりイメージが沸くと思う。正しいかは別として、食糧不足になると植物工場の生産性を上げる、エネルギー・資源不足になると蓄電池の生産を増やすなどである。

これまでの反省も含め思うことは、チャレンジしながらキーワードに向かって進む上で、中小企業も変化していかなければ次のステージに進めないということ。ビジョンのどこかにそのようなことを書ければ、現状を認識した上で、決意と覚悟をもって変化していき、新たなチャレンジをしていくという流れが見えて、より良いのではないか。ビジョンへの取組は、広域連合という組織が単独で行うものではなく、関わる産業界や行政を含め、ビジョンをもとに決意と覚悟を宣言するイメージだと思う。そのニュアンスをどこかに含めることができればよい。

<座長>

マイクロプラスチックは、地球温暖化や生物多様性といったカテゴリーとは次元が異なるため、記載に工夫が必要。

また、各項目は関西にとってどういう意味があるのかを考えるべき。例えば、キーワードをグローバルと国内に分けているカテゴリーについても、その下に関西を付け加え、関西の課題は何なのか、分かる見え方になるとよい。関西の意識を忘れないように。

<委員>

マイクロプラスチックは大事な課題であるが、他項目と粒度が異なるため、用語の整理が必要。他にも、「技術革新、DX」については、その下の「イノベーション」のほうがより広義になるため、「イノベーション、DX」のほうが良いのではないか。

キーワードは、以降の内容(将来像の実現に向けたアプローチ等)につながっていくと分かり易い。また、言葉として、ディストラクションはスマホがデジカメを駆逐した例が挙げられると思うが、行政がそれを進めるべきかというのは難しいところ。カーナビ等、日本が強みとしていたことが駆逐されたように、既存産業が打撃を受

けることもある。トレンドとして確かに存在するキーワードを、ビジョンにおいてどのように消化していくかは検討が必要。

関経連が昨年12月に、DXの分析レポートを出している。関西の現在地を示すものとして全国の比較や企業の分析などを行っているため、ぜひ参考にしてほしい。

<座長>

トレンドとキーワードとの対応が、関西を考える上でどうなのか等を踏まえると違和感があるため、キーワードを精査してほしい。

また、「社会構造」の中に「国際経済」があるが、内容はジオポリティカル(地政学)な力の関係。タイトルだけ見ると貿易の印象を受けるため、表現を工夫してほしい。

<委員>

ビジョンは、九州、東海等でも通じるものではない、関西らしさが必要。「現状分析・将来展望」の部分でなくとも、「検証」でしっかりと分析することで、関西らしさを表せると思う。

「不確実性」について、未知の不確実性も必要ではないか。分からないから不確実ということ。

将来を展望する際のキーワードについては、マイナスの要因が多く見られるが、マイナスをプラスにしていくような表現が必要ではないか。例えば、AI やロボットは、労働力不足への対応になる。プラスの要因をキーワードとして含む必要がある。

<事務局>

資料としてまとめるにあたり、限られた紙面の中でどこまで情報を落とし込むか悩んでいる。トレンド分析について、仮に関西を項目として入れる場合、そこからつながる将来を展望する際のキーワードが入りきらずページが分かれてしまい、見だ目上、分かりにくくなってしまう。また、キーワードの部分を詳しく丁寧に書けばより分かり易いということで書き出すと、全体を捉えるには細かすぎるものになるし、項目を絞りこまなくてはいけない。

これまでの反省点や変革に向けた決意や覚悟は「検証」で滲み出しができれば、ストーリーとして分かりやすくなるのではと考えている。

キーワードはコンパクトにしたくてカタカナを使っているが、もう少し丁寧に説明した方が課題やチャンスをあぶり出せるため、一番工夫がいると感じている。

<座長>

これまでの反省は「検証」の欄に入れ込み、その課題を明示できれば、上手く伝えられるかもしれない。また、資料をまとめる上で情報を取捨選択すべきなのはそ

のとおり。何々については後に述べる等、一文を入れることで、議論の拡散を限定する方法もある。表の見方についても注を入れるなど説明すれば良いかもしれない。

現行案は、書くべきことと参考文献が混在している印象を受ける。イノベーションの光と影的なことと言うと、ユーラシアグループはグローバルリスクトップ10において、AIは暴走する可能性をみて一つのリスクとしている。マイナス要因が多く見える現行案も、ポジティブに捉える観点を追加してキーワードを書き換えられるかもしれない。

メガトレンドの抽出は若干の修正で異論ないが、国内の部分とキーワードについては、精査が必要だと考える。

【P.5～8 将来像実現・目標の達成に向けたアプローチ、関西チャレンジ①～③】

<委員>

1は新しい産業、2は既存産業のアップグレード、3はそれを支える社会インフラという整理で理解はできる。気になったのは、チャレンジは誰がするのかということ。広域連合だけではなく民間企業や個々の人々もチャレンジをしていくということなので、チャレンジしろという精神論になってしまわないように、関西広域連合がチャレンジをどうサポートするのかということに上手くつなげることができれば良い。その上で、連合が行うチャレンジ環境の整備・充実について具体的に書ければ、広域連合の役割にも繋がると思う。

<事務局>

最終的にはそこまで持っていきたいと考えている。現時点は骨子段階のため入口の議論だが、ここで出てきた項目で今後出口までつなげていきたい。

<委員>

P.4「めざす将来像・目標」について、特に数値目標については、少なくとも日本の中で他地域よりも伸ばしていくことを前提に書かれているが、今までと同じことをやっているのは難しい中で、人口が大きく減少していく、ましてや関西ではより減少となる中では、その先の成長することまで結び付いていかないと思う。反転攻勢しようとするなら、人がいかに関西に集うかが大きい。人が多くなれば消費量が増え、経済が活発化し、GRPが伸びていく。関西域内の中核都市をいかに、人が住みたい、働きたい、行きたいと思うような場所に変えていくかが非常に重要。そしてそのためには、各地域の文化をどうやって大事にしていくかにかかってくるのではないかと。多様な文化を尊重して育てていく。産業が地域の文化を支えるよ

うに結びつけることで、産業が活性化する。人が住みたいと思えるような、地域の特色を出せる文化を大切にするという観点を入れてもよいと思う。そういった文章をいれることで、関西は他県よりも人口減を緩やかにしていき、日本の中では伸びていくということを挙げてはどうか。市場を増やすことを考えるのが重要。人口が増えることにつながるような施策を産業ビジョンでうたってもよいのではないか。文化も、従来からの伝統的なものはもちろんのこと、2.5次元演劇やeスポーツなど。時代に合った新しい文化をそれぞれの土地で作っていくことも重要。

<座長>

成長の中身をどう考えるかということ。関西は多様な産業構造をもった府県の集まりということを認識することが必要。今後資料等で整理されていくと思うが、しっかりと書き込まないといけない。関西の人口減のスピードは全国平均よりもかなり速い。消費マーケットが減り、生産性の向上がなければ、経済成長がマイナスになり、GRP も伸びない。その意味で、成長を決めるのは投資である。発想としては、関西以外の地域から投資をもってくるというのが大事。域外からの投資、海外からの投資が増えた場合、成長率は必ず上がる。

また、国内人口は減っても、魅力を高めることで域外からの流入を促進することで、関西圏域の人口減少を抑制することができれば、消費減も抑えられ、トータルとして様々なマイナスは抑えられる。

現行のチャレンジには、産業構造的な視点はあまり入っていない。どこでどう支えるのかという意識は持っておく必要がある。各府県はユニークな産業構造を持っている。例えば和歌山であれば、化学、鉄鋼、金属が多く、農業も多い。大阪は製造業のシェアは他県に比べて低く、流通などサービス業のウエイトが大きく、土地がある兵庫や滋賀で製造業が盛ん。関西産業の特徴を示した上で、旧来型の産業と革新を起こしていく産業に分けてアプローチを行っていくというのが分かるように書くべき。

<委員>

P.5「将来像の実現・目標の達成に向けたアプローチ」のチャレンジの仕分けは少しわかりにくいので、P.6「関西産業の成長に向けた“関西チャレンジ”」の中の取組アイデアを整理すればイメージし易いと思う。

人材について、関西で育った人材が東京等にかかり流出している。その受け皿となる産業構造が必要。非常に重要な人材育成と合わせて、産業の受け皿としての企業の育成も必要ではないか。

あまり細かく書きすぎると逆に分かりづらくなるため、全体としてイメージしやすい形で整理することが大事。

<座長>

これまでアプローチやイメージを書ききることに注力してきたが、データの整理も揃ってきていると思う。提案だが、今回は人材も含め、関西の課題や産業構造を整理・理解した上で議論を進めていくべき。早い段階で事務局から示してもらいたい。

<委員>

チャレンジ①～③のまとめ方に違和感はない。産業の特色については、痛しかゆしの面がある。産業別の売上と従業者数を関西、関東、中京圏で比べた場合、関東、中京圏は輸送機器、関西は突出した産業がない代わりにまんべんなく分布している。なんでもあるのが関西の強みであるが、これは世界的に見ても珍しい地域。組み合わせたものが強いということになるが、マクロ的に見ると特色付けが難しい。関西において何故蓄電池が強いかというと、元々繊維、創薬、家電産業があったから。それらをすり合わせた産業と言えると思うが、自動車のような分かり易い産業がない中で、どのように整理するかは難しいところ。

<座長>

関西の産業構造の特徴は何か、ポジティブにしっかり書ききったほうがよい。特徴をどう活かすかという議論ができるし、その分析の上にチャレンジがあればいいと思う。

<委員>

3つの目指す姿の方向性としては理解。関西経済の短所や長所を分析して、長所を伸ばすのか、あるいは短所を解決していくのか。チャレンジが関西を変える戦略でもあるが、ストーリーとして落とし込む必要がある。現状や課題があって、それを解決するために目標があり、目標達成のために戦略があるというようなこと。目標を達成するための流れを整理できれば、よりわかりやすくなる。

<委員>

関西には多様な業種があり、同業種の中でも一括りにできない。一つの方向を向くと全体が良くなっていくという状況ではないのが関西の特徴といえるかもしれない。

<座長>

文章のヘッドラインというのは、それだけで全てを包含し表現しきる内容でなければならないが、例えば、チャレンジ①についても、主語が明確でないように思う。

<事務局>

チャレンジ①については、エコシステムを確立することで集積が加速し、更なるチャレンジを生んでいく状態が続いていく、そういった状態を作っていくことがチャレンジと認識。エコシステムができて終わりではなく、それを拡大していく作用も頑張っ生み出していくということも含め、チャレンジだと思っている。

二段階のイメージ。新産業を想定しているため、まだ産業として確立できていない状態。第一フェーズとしてエコシステムをしっかり作り、他に誇れる産業として自立・確立する。次に、それを強みに求心力として活用し、関西に来たらこんなことができるとか、関西に行けば自分たちも成長できると、様々な人に思ってもらえるようにもっていけるような取組までチャレンジしたい。

<委員>

さらなるチャレンジを連続させていくという表現のほうが意図が伝わるかもしれない。

<委員>

めざす姿とチャレンジは、取組アイデアの最大公約数的なものと理解した。

<委員>

チャレンジ②の「ビジネスによる持続可能性で社会に貢献」という表現の意味が分かりにくい。環境問題でいうところのサステナブルということか、長期的に継続できるビジネスということなのか。また、「少し先」はいつを指すのかも曖昧。もう少しコンパクトにまとめられると思うので、表現を工夫してほしい。

<座長>

「関西広域産業ビジョン」が読んでもらえるか否かについて、ヘッドラインは非常に重要。これまでアイデアや取組に注力してビジョン改訂作業を行ってきたが、今一度、ヘッドラインについてしっかり説明しきれているか、見直していただきたい。

【P.9 関西広域連合による取組み】

<座長>

例えば、九州には知事会はあるが広域連合のような具体的な広域政策を決定する組織はない。ただ、広域連合の予算には限りがあるため、具体的な政策を論じる場合、広域連合が現実に対応できるのは何か、取り組める課題は何かを、しっかりと限定しておかないといけない。

4つのバリューとあるが、広域連合の特徴であり、それを意識して取組を実施すると表現したほうが分かりやすいのではないか。

<委員>

4つのバリューは納得。広域連合の役割については、固有のバリューというよりも広域連合という組織になることで得られる価値であり、関西以外にも当てはまり得る内容かと思うが、全国的にこれだけ大きな地域連合が存在しているところはないため、その意味では納得。但し、バリューと役割の内容はあまり差異がないように感じる。

行政として産業を活発化させていくために必要なことを考えると、既存の規制を緩和させるとか、手続きの簡素化等により新しい事業を起こしやすくすることが考えられる。関西全体で足並みをそろえて取り組むべくそのようなことを指摘していくことで、単純な横連携よりも、産業を活発化させるとアピールできると思うので、検討してほしい。

<座長>

広域連合のもつリソースは限られるため、効果のある政策にフォーカスしていくということは意味がある。どのような政策が必要かを考えるには、そのニーズやできることの研究が必要かもしれない。

<事務局>

広域連合の一つの特徴であるとともに限界の部分であるが、個々の自治体を超える権限・権能があるわけではない。連合の実態は、各自治体間で連携できるものについて事業を検討し効率的に行うというもの。そのため、関西広域で取り組むことにより、取組がより進展するであろうアイデアの提案は可能かもしれないが、実施主体や求める達成度を考えると、非常に難しい。データ連携や行政 DX の流れにおける取組等は関西広域連合の他部局で実施できているように、関西の中で連携を模索していこうという蠢きはあり、意識も高まってきてはいるが、広域連合がビジョンを策定し、それに基づいて各府県が動くというところまで至っていない現実がある。

バリューを提示した意図についても、様々な制約がある中で、広域連合がやるならここに意味がある、効果がある、それ以外はやらないということを暗示している。関西広域で取り組んだほうがよいことが全て集まってくる構造になっていないこともあり、関西全域に効果がわたるというものに純化・特化していく。限られた予算の中で効果を生み出すことに収斂していくべきということを含めて書いている。

<座長>

現状分析や将来展望については、100%これでいいというものはないが、本日のような議論の積み重ねが活かされているというまとめ方が必要かと思う。

チャレンジの項目で書き込まれている内容がやがてパブコメ等で評価されるため、ここを明瞭に書ききることが重要。ビジョンは簡潔である方が良い。今までの議論の咀嚼度によって議論が後戻りしないように、データを確認し、関西の特徴を再整理して議論すべきと考える。

次回の改訂委員会では関西万博も意識しながら、成長シナリオを書いていくことが必要。またポテンシャルマップも仕上げることで、何を狙っているのかわかりやすくなる。

以上